

事案名	浜名湖周辺（館山寺）の事案（静岡県22-1-1）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・証言（昭和25年当時農民だった住民の証言）〔13〕</li> <li>・証言（〔13〕の弟の証言）〔14〕</li> <li>・『静岡新聞』昭和27年7月17日〔16〕</li> <li>・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について（報告）」平成15年9月26日〔18〕</li> </ul>
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『平和への祈り』平成12年2月25日〔A1〕</li> <li>・証言（昭和27年当時小学生だった住民の証言）〔A2〕</li> <li>・『平成16年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔A3〕</li> </ul>
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>昭和25年9月以降、旧軍の毒ガス入りと思われるドラム缶を、自衛隊員と思われる3～5名の人物が浜松市呉松町の松林内に埋設している現場を目撃した。</p> <p>発見・被災・掃海処理等情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和25年9月以降（浜名湖掃海後）に、旧軍の毒ガス入りと思われるドラム缶を、自衛隊員と思われる3～5名の人物が浜松市呉松町の松林内に埋設している現場を目撃したとの証言がある〔13〕。また、同証言者の弟は、遠州灘掃海後に館山寺の湖岸に打ち寄せられたドラム缶を目撃し、また、叔父（昭和20年に浜名湖へ投棄した従事者）から缶の埋めた場所を聞いたと証言している〔14〕。</li> <li>・昭和27年7月15日、館山寺北浜名湖岸にドラム缶1缶が漂着しているのが発見され、東浜名地区北庄内村派出所に届け出された。ドラム缶は、派出所が処理した〔16〕。</li> </ul> <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・館山寺大草山付近の井戸水からはヒ素は検出されなかった。館山寺大草山の山林は利用されていない〔18〕。</li> </ul>
新たな情報	<p>発見・被災・掃海処理等情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・郷土史研究家は、浜名湖に投棄された毒ガス缶について、「岸に打上げられるドラム缶（200L入り）があり、手が爛れて、漁師をやめた人がいたという（地元住民談）。証言者（旧軍に勤務していたトラック運転手）も、呉松の漁師が火傷のような怪我をしたことや、証言者自身もドラム缶を4～5本運んだという。」と記している〔A1〕。</li> <li>・昭和27年頃、山林内で、200L缶よりも小型のドラム缶が一部頭部を露出した状態で2列3個ずつ並んで埋められ、周辺に石灰と思われる白い粉が撒かれていたのを目撃したが、家族からは毒ガスなので近づくなと言われた。その後缶がどうなったかは覚えていない、との証言がある〔A2〕。</li> </ul> <p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市が行った周辺5つの井戸の水質調査では、ヒ素は、環境基準値（0.01mg/l）以下であった〔A3〕。</li> </ul>

事案名	浜名湖周辺（三ヶ日町）の事案（静岡県 22 - 1 - 2）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・証言（埋設作業に係った住民）〔7〕</li> <li>・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について（報告）」平成15年9月26日〔18〕</li> </ul>
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会（第8回）」資料8〔A1〕</li> </ul>
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>昭和21年あるいは22年の3月～4月頃に、三ヶ日町大崎半島に漂着した毒ガス入りと思われるドラム缶を消防団約10人で運び、山林に埋設した。</p> <p>発見・被災・掃海処理等情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元消防団長及びドラム缶を埋設した山林の所有者の証言によれば、昭和21年あるいは22年の3月～4月頃に、三ヶ日町大崎半島に漂着した毒ガス入りと思われる黄色い帯が巻かれていたドラム缶を消防団約10人で運び、三ヶ日町大崎の山林に深さ3.6mの穴を掘って埋設したと記載されている〔7〕。</li> </ul> <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・静岡県が行った水質調査によると、周辺3つの井戸では、ヒ素は、環境基準値（0.01mg/l）以下であった。三ヶ日町大崎半島の山林は利用されていない〔18〕。</li> </ul>
新たな情報	<p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成16年10月に環境省が実施した地下水調査の結果、毒ガス成分は検出されなかった〔A1〕。</li> </ul>

事案名	浜名湖周辺（細江町）の事案（静岡県22-1-3）
フォローアップ調査資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『中日新聞』平成15年7月15日〔5〕</li> <li>・証言〔6〕</li> <li>・『静岡新聞』昭和22年7月17日〔8〕</li> <li>・『朝日新聞』昭和47年5月30日〔9〕</li> <li>・証言（元消防団長の証言）〔11〕</li> <li>・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について（報告）」平成15年9月26日〔18〕</li> </ul>
追加資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『平成16年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔A1〕</li> <li>・「国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会（第8回）」資料8〔A2〕</li> </ul>
平成15年度フォローアップ調査報告書の要約	<p>昭和22年、浜名湖に浮いていた缶を開けた兄弟2人が死亡し、引き揚げられた毒ガスが廃棄された。</p> <p>発見・被災・掃海処理等情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・付近の住民の証言によれば、「昭和20年8月15日に、自宅北側の山（細江町）で4～5人が掘った穴にドラム缶をいくつか埋めている光景を目撃した。終戦時に、浜名湖の都田川河口付近に空のドラム缶が多数浮いているのを記憶している。ドラム缶の処分に困った陸軍が浜名湖に捨て、中身がある缶については山に埋めたのではないかと記載されている〔5〕。しかし、静岡県の聞き取り調査では「直接、毒ガスのドラム缶を埋設した事実は知らないが、当時その周辺の者からそういう話を聞いているだけで、埋設にかかわっていないし、その光景も見えていない」と、報道とは異なる証言が記載されている〔6〕。</li> <li>・昭和22年7月15日に、浜名湖に浮いていた毒ガス缶1個を漁師2名が船上で開け、イペリットにより数日後に死亡した〔8〕。同じ頃、付近の農民も浮いていた容器に触れて両手に水疱ができたと記載されている〔9〕。</li> <li>・元消防団長の証言によれば、昭和22年7月16日に、浜名湖に浮いていた缶を開けた兄弟2人が7月22日に死亡し、引き揚げられた毒ガス缶は当時の自治体警察の要請により、細江町気賀山中に横向きに埋設したと記載されている。なお、元消防団員の証言によれば、GHQに埋設場所を教えたとし、後にGHQが毒ガス缶を掘り起こし処分したという話を聞いたと記載されている〔11〕。</li> </ul> <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・静岡県が行った水質調査によると、周辺5つの井戸では、ヒ素は、環境基準値（0.01mg/l）以下であった。細</li> </ul>

	江町気賀の山林は未利用である〔18〕。
新たな情報	<p>その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 毒ガス缶を埋設したとされる地点は、送電線鉄塔の北側で、現在は草木の生い茂る林の中である。鉄塔の建設年度が1925年（大正14年）であることを電力会社に確認したとの情報がある〔A1〕。</li> <li>・ 平成16年10月に環境省が実施した地下水調査の結果、毒ガス成分は検出されなかった〔A2〕。</li> </ul>

<p>事案名</p>	<p>浜名湖周辺（三方原陸軍教導飛行団・第3陸軍航空技術研究所三方原出張所）の事案（静岡県22-1-4）</p>
<p>フォローアップ調査資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「連絡発第6605号 浜名湖に投棄した軍需品について」昭和25年1月19日〔2〕</li> <li>・証言（元第3陸軍航空技術研究所三方原出張所長の証言：昭和48年調査）〔19〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団教導防護隊長の証言：昭和48年調査）〔1〕</li> <li>・「元飛行団所属隊員陳情書」平成元年7月〔3〕</li> <li>・『史跡が語る静岡の15年戦争』〔4〕</li> <li>・「ドラム缶入り毒ガスについて」平成3年2月13日〔12〕</li> <li>・『朝日新聞』昭和47年5月30日〔9〕</li> <li>・『静岡新聞』昭和37年3月29日〔17〕</li> <li>・「旧軍毒ガス弾等の全国調査結果報告（案）」資料3の2No.1〔10〕</li> <li>・化学室担当者ノート「戦後における旧軍毒ガス弾等の処理の状況(14.6)」〔15〕</li> <li>・「『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について（報告）」平成15年9月26日〔18〕</li> <li>・航空部隊による毒ガス実験一覧表（タイトルなし）〔13〕</li> </ul>
<p>追加資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「連絡発第6605号 浜名湖に投棄した軍需品について」昭和25年1月19日〔A1〕</li> <li>・『告白的 航空化学戦始末記』平成4年10月16日〔A2〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団航空整備兵・兵長）〔A3〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団航空整備兵・兵長）〔A4〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団特別幹部候補生第1期生・兵長）〔A5〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団特別幹部候補生第1期生・兵長）〔A6〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団防護審査班員）〔A7〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団員、終戦時各務原陸軍航空廠次長・技術大尉）〔A8〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団防護第2隊・上等兵）〔A9〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団防護第2隊・上等兵）〔A10〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団司令部副官付暗号電報班・上等兵）〔A11〕</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団司令部副官付暗号電報班・上等兵）〔A 1 2〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊・兵長）〔A 1 3〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団ひ隊特別幹部候補生・兵長）〔A 1 4〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団ひ隊特別幹部候補生・兵長）〔A 1 5〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団飛行場警備担当・少尉）〔A 1 6〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団ひ隊飛行機整備員・軍属）〔A 1 7〕</li> <li>・『平和への祈り』平成12年2月25日 庄内地区戦時体験刊行会〔A 1 8〕</li> <li>・『平成16年度国内における旧軍毒ガス弾等に係る情報収集及び取りまとめ業務報告書』〔A 1 9〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原教導飛行団教導飛行隊・伍長）〔A 2 0〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊・伍長）〔A 2 1〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊特別幹部候補生・兵長）〔A 2 2〕</li> <li>・証言（元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊特別幹部候補生・兵長）〔A 2 3〕</li> <li>・「昭和48年の『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について（総括表）」及び「昭和48年の『旧軍毒ガス弾等の全国調査』のフォローアップ調査結果について」〔A 2 4〕</li> <li>・A Rough Plan of the MIKATAGAHARA Air-Field(Field for Bomb Practice)〔A 2 5〕</li> <li>・「資料『陸軍三方原教導飛行団名簿』の送付について」〔A 2 6〕</li> <li>・A Rough Plan of the Buildings Attached to the MIKATAGAHARA Air Force〔A 2 7〕</li> <li>・「浜松陸軍飛行学校と航空毒ガス戦」2002年10月〔A 2 8〕</li> <li>・『中日新聞』平成15年7月15日〔A 2 9〕</li> <li>・「陸密第四九四四號 軍需動員関係部隊ノ出張所等ノ名称及位置ニ関スル件中改正ノ件達」〔A 3 0〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団気象班長・大尉）〔A 3 1〕</li> <li>・旧軍毒ガス弾等についてのアンケート調査結果（元三方原陸軍教導飛行団ひ隊飛行機整備員・軍属）〔A 3 2〕</li> </ul>
--	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「浜松基地の歴史3」講演会(証言のまとめ) (<a href="http://www16.ocn.ne.jp/~pacohama/no0004/0005kitisi.html">http://www16.ocn.ne.jp/~pacohama/no0004/0005kitisi.html</a>より)〔A33〕</li> <li>・『平成16年度B/C事案における第2次地下水調査業務 報告書』〔A34〕</li> </ul>
<p>平成15年度 フォローアップ調査報告書の要約</p>	<p>浜名湖とその周辺には、終戦時に三方原陸軍教導飛行団（航空化学戦部隊）と第3陸軍航空技術研究所三方原出張所が保有していた毒ガス缶が廃棄された。戦後、浜名湖とその周辺では、毒ガス缶の発見や被災の事案が存在している。</p> <p><b>生産・保有情報</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・証言によれば、証言者（元三方原陸軍教導飛行団防護隊長）は、終戦時、三方原陸軍教導飛行団はイペリット缶80本（16トン）・ルイサイト缶20本（2トン）を保有していたと述べている〔1〕。</li> <li>・終戦時に、三方原陸軍教導飛行団にはイペリット・ルイサイトが缶で4～5本存在した〔2〕。</li> <li>・証言によれば、証言者（元第3陸軍航空技術研究所長）は、終戦時に、第3陸軍航空技術研究所三方原出張所にはドラム缶1本が存在したと述べている〔19〕。</li> </ul> <p><b>廃棄・遺棄情報</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元三方原陸軍教導飛行団防護隊長の証言によれば、終戦時に、三方原陸軍教導飛行団が保有していたイペリット缶80本（16トン）・ルイサイト缶20本（2トン）を浜名湖に投棄するように命令したと記載されている〔1〕。</li> <li>・終戦時に、三方原陸軍教導飛行団にはイペリット・ルイサイトが缶で4～5本存在しており、これを8月16日～17日に浜名湖に投棄した〔2〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団関係者は、終戦時に、大型トラック2台分の中型ドラム缶（糜爛性ガス入り）を浜名湖の中央付近に投棄したと陳情書に記載している〔3〕。</li> <li>・終戦時に、三方原陸軍教導飛行団は毒ガスを浜名湖北部、同飛行場の溝等に捨てたと記載されている〔4〕。</li> <li>・証言によると、証言者（元第3陸軍航空技術研究所三方原出張所長）は、終戦時に、イペリット缶1本を旧引佐郡中川村（現細江町中川）またはその付近の地中に埋設したと思うと記載されている〔19〕。</li> <li>・地元の漁師の証言では、終戦後に軍がドラム缶入りの毒ガスを浜名湖に投棄し、浜名湖が荒れたり、潮の関係で缶が岸に漂着するようになり、漂着した缶は三ヶ日の海岸に集めた</li> </ul>

	<p>が、被災者が出たので騒ぎが大きくなった。昭和22年3月から昭和25年にかけて掃海が行なわれ、異物にあると潜水夫が船に引揚げ、太平洋に投棄した。その量は全部で40～50本であったと思うと記載されている〔12〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浜名湖の掃海を請け負った民間企業の元社員は、昭和25年に浜名湖からイペリット缶約100本を引き揚げて、遠州灘に再投棄したとしている〔9〕。</li> </ul> <p>発見・被災・掃海処理等情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・終戦後に、付近の住民が湖上に浮かんだ缶（イペリット・ルイサイトの缶）にふれて軽傷を負い、三方原陸軍教導飛行団残務整理部は治療費として500円を支払った〔2〕。</li> <li>・元軍人が十王堂の境内にイペリット入り試験管10本を埋めたとの申し出を受けて昭和37年3月28日に自衛隊が搜索したが発見されなかった〔17〕</li> <li>・昭和37年3月27日から28日にかけて、浜名湖で毒物容器2缶が発見されたと記載されている〔10〕〔15〕。</li> <li>・昭和37年6月24日から29日にかけて、浜名湖周辺で毒物容器2缶が発見された〔10〕〔15〕。</li> <li>・昭和27年6月1日に、浜名湖でイペリット入りの缶1本により負傷者が出たと記載されている〔10〕〔15〕。</li> <li>・昭和30年12月20日から22日にかけて、浜名湖でイペリット缶1個が発見されたと記載されている〔10〕〔15〕。</li> </ul> <p>現在の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浜名湖は、単位面積あたりの漁獲量は全国有数を誇り、昔から潮干狩りや釣り等にも利用され、近年ではリゾートやマリンスポーツの場所として利用されている〔18〕。</li> </ul>
<p>新たな情報</p>	<p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元三方原陸軍教導飛行団関係者に対する調査の結果、浜名湖に投棄したイペリット・ルイサイトは、静岡県浜名郡神久呂村（昭和55年3月31日に浜松市に合併）の陸軍飛行学校毒瓦斯格納庫に保存してあったと記憶するとの情報が得られた〔A1〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団関係者は、同飛行団には、研究用として20トンほどのイペリット・ルイサイトが飛行場の空き掩体に格納されていたようである、と記している〔A2〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団航空整備兵（兵長）は毒ガスの保管場所について「三方原演習地の高台だと思います」と記している〔A3〕。この情報について証言を聴取したところ、30～40個のレンガ色をした素焼きと思われる壺のようなもの</li> </ul>



	<p>が基地内の道に沿って並べられていたが、壺の周辺で強い臭気がしたことから、同僚からその中味は毒ガスだと言われていたことから、壺の中味は毒ガスでないかと考えていると証言している〔A4〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元三方原陸軍教導飛行団特別幹部候補生第1期生（兵長）は、三方原教導飛行隊の近隣の松林（複数箇所）に飛行機を隠しており、その場所の一つに、毒ガスが入ったドラム缶があるのを見た、付近の草が枯れており、20～30本が整然と並べてあったと証言している〔A5〕〔A6〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団事務室勤務審査班員は、三方原陸軍教導飛行団に所属したのは昭和18年頃からだが既にその時には毒ガス弾等を保管しており、イペリット（高さ150cm程度、直径40cm～50cmの黄色の線が入ったドラム缶）40～50缶、演習の時には臭いをかくためにホスゲンなど少量を保有していた。イペリット入りドラム缶は、飛行場付近の松林の中に野積みされていた、と証言している〔A7〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団員（終戦時各務原陸軍航空廠次長・技術大尉）は、三方原陸軍教導飛行団には、きい、あか、みどり、缶及び爆弾があった、詳しく記憶していないが実験用だったので缶として数本・弾としては10～20ヶ程度だったと思う、保有期間は昭和16年～20年4月、それ以降は同部隊から転出したので不明と記している〔A8〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団防護第2隊員（上等兵）は、自分が所属した防護隊は、昭和20年2月に三方原から引佐郡中川村の寺に移転したが、建物のそばに「常時2個位のイペリット缶が置かれていた」と記している〔A9〕。これについて証言を聴取したところ、この缶は200リットルドラム缶サイズで、肉厚、色は茶色で黄線等の装飾や文字はなかった。附着すると糜爛すると聞かされていた内容でイペリットと思われるが内容、副成分は分からない、また、くしゃみ剤や催涙剤も使用したり、体験した記憶があるが詳細は覚えていないとのことである。また、「下士官の訓練時には毒ガスを瓶に小分けし、手押し車で訓練場所へ運搬する仕事を担当した」と証言している〔A10〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団司令部副官付暗号電報班（上等兵）は、毒ガスはカ隊が保管していたと思われる、自分の入隊時にはすでに毒ガスは保管されており昭和19年以前から終戦の部隊解散まで保管されていた。容器はガソリンのドラム缶様で頑丈でやや小さかったと思う（キイ1号、2号、混剤の容器）。他に飛行機に取り付けて霧状に散布するプロパンガスのボンベ大のものもあった、きい剤の他にも混合剤がかな</li> </ul>
--	---

りあったと思う。あか剤・みどり剤・あお剤容器には赤・青・緑と色分けしてあったが量的には不明。飛行団の営門の右側に化学隊があり毒ガスの保管場所であったと思う、と記している〔A 1 1〕。これについて証言を聴取したところ、小型のドラム缶、ボンベ、スプレー缶大などの形をしたものがあったとし、「毒ガスは三方原基地以外では見ていない、疎開先の寺でも見ていない」とも証言している〔A 1 2〕。

- ・元三方原陸軍教導飛行団ひ隊関係者（兵長）は、保管していた毒ガス弾等の種類について、つぼを外出時に見たが量は不明、その保管地点は浜松鉄道（軽便）線路沿線松林と記している〔A 1 3〕。
- ・元三方原陸軍教導飛行団陸軍特別幹部候補生（兵長）は、毒ガス弾・爆弾・缶・つぼ・瓶・筒は総てあったように思うが、量については不明と記している〔A 1 4〕。これについて証言を聴取したところ、「使われた毒ガス弾の容器は50kg容器だったと思う。金属で出来ていて、色はわからない。ビン詰めもあったと思う。今で言うと劇薬の入れ物のようなもので高さが35～40cm位で竹の籠に入って積んであった。最初からこれはガスが入っているというのは、わかっていた。しまってたのは、掩体だった。積んであったし、何ヶ所にもあった」と証言している〔A 1 5〕。
- ・元三方原陸軍教導飛行団飛行場警備担当（少尉）は、ドラム缶入りのイペリット、ルイサイトがあるという話は聞いたがどこにあったかは不明、と記している〔A 1 6〕。
- ・元三方原陸軍教導飛行団飛行機整備員（軍属）は、ドラム缶（きい剤 当時の伝聞）は第7飛行隊の第9格納庫裏にあった、そこでモルモット等を飼っていたと証言している〔A 1 7〕。

#### 廃棄・遺棄情報

- ・住民の回想には、昭和20年8月17日前後に三方原陸軍教導飛行団から館山寺港にイペリット、毒液ドラム缶等が運ばれ、「毒液ドラム缶は大筏付近の深い処へ、銃弾は汽船場の棧橋から海へ捨てられました」との記載がある〔A 1 8〕。
- ・三方原陸軍教導飛行団の隊員が、「毒ガス入りのドラム缶をトラックに積み館山寺まで運び、浜名湖北部に投棄し、一部は三方原飛行場の溝に捨てたと証言している」と記されている〔A 1 8〕。
- ・元三方原飛行団員と元仙台32部隊の隊員から、終戦から8月末にかけて、7から8人の隊員とともに大型トラック2台でイペリット、ルイサイト入りのドラム缶約40本を館山寺に運び船着場から船により近くの深みに捨てたとの情報が得

	<p>られたと記されている〔A19〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊員（伍長）は昭和20年8月末日～20年9月に「浜名湖北方の気賀附近の湖中にドラム缶をそのまま廃棄した。記憶は定かではないがかなりの量だった（数年後アメリカ軍が回収したと側聞している）と記している〔A20〕。これについて証言を聴取したところ、ガスの入った容器（飛行機から散布するもの）も浜名湖へ投棄し、自分たち以外の者からも毒ガス容器を捨てた話を聞いたことがあり、その者は、アメリカ軍が回収したという話を聞いた、と証言している〔A21〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団陸軍特別幹部候補生（兵長）は、「所管が違うので詳細不明なるも、かなりの量を車で浜名湖（下気賀など）、飛行機で海（遠州灘）に投棄したと思う」と記している〔A14〕。この情報について証言を聴取したところ、「記憶にあるのは、夕食時に遅れてきたひとがいたので、なんで遅れたのかと聞いたらトラックで浜名湖に捨ててきた。重爆撃機の腹にも抱えさせて、遠州灘にも捨ててきた。30分くらいで往復できるので、何度も捨ててに行っていた」と証言している〔A15〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊特別幹部候補生（兵長）は、昭和20年8月20日前後の日に直径30～40cm、高さ40～50cmの缶を合計10個運び船に積み込んだ。中身はイペリット（黄リンも少しあった）であると聞いた、船員は海（遠州灘）に捨てると言っていたと証言している〔A22〕〔A23〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団防護隊審査班員は、化学班に所属していた同僚から、毒ガスを浜名湖に捨てたという情報も聞いたと証言している〔A7〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団防護第2隊員（上等兵）はイペリット缶を浜名湖に捨てたということは知っているが自分は立合わなかったと記している〔A9〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団上等兵司令部副官付暗号電報班員（上等兵）は、きい1号、きい2号、混剤赤、青、緑剤すべてを廃棄したと思うが量的にはわからない、浜名湖最北部の最水深に投棄されたと聞いたことがあるが「うわさ」であって確実な情報ではない、と記している〔A11〕。</li> </ul> <p>その他情報</p> <p>(1) 三方原陸軍教導飛行団・第3陸軍航空技術研究所三方原出張所に係る情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三方原陸軍教導飛行団の場所は、旧三方原陸軍爆撃場及び陸軍飛行場浜松演習廠舎内であった〔A24〕。</li> <li>・三方原陸軍教導飛行団は、終戦まぎわに三方原村、引佐郡、</li> </ul>
--	---

	<p>都田村に疎開したとの情報がある〔A25〕〔A26〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・米軍資料によれば、Mikatagahara Air Force は、現在の自衛隊宿舎付近に存在していたと記されている〔A27〕。</li> <li>・郷土史研究家は、三方原陸軍教導飛行団は、三方原北方の引佐郡へも疎開した。引佐郡から浜北市方面にかけて当時本土決戦用に護古部隊が配備され、飛行団の部隊と連携していたとみられると記している〔A28〕。</li> <li>・細江町内には、『三方原化学研究所』の看板を揚げた建物が存在していたと記されている〔A29〕。</li> <li>・第3陸軍航空技術研究所三方原出張所は、静岡県引佐郡気賀町西気賀に存在したとの情報がある〔A30〕。</li> </ul> <p>(2) 三方原陸軍教導飛行団による毒ガス演習等に係る情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元三方原陸軍教導飛行団員は、昭和19年12月15日に天竜川河口付近で行われたイペリット撒毒実験に参加し被災したと記している〔A2〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団教導飛行隊員(伍長)は、天竜川の河口付近で糜爛性ガスの撒布訓練を行ったと証言している〔A20〕〔A21〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団気象班長(大尉)は、「天竜川の河口でよく演習が行われたが、一度だけイペリットかルイサイトが空中撒布された事があります」、「詳細は知りませんが、煙幕用の薬剤はかなりの量がつぼに入っていたようです」と記している〔A31〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団防護隊審査班員は、演習(霧状の毒ガスの中、息を止め風上に逃げる)の際に逃げられずに被害を受けたものがいた。水泡ができ、衛生班が治療にあたった、と証言している〔A7〕。</li> <li>・元三方原陸軍教導飛行団ひ隊飛行機整備員(軍属)は、飛行団には「ひ隊」、「ほ隊」があり、毒ガスの保管は、ほ隊が行ったと思う。ひ隊では雨下訓練をしたが中の液体は染料であった。ガス弾は見たことがないが、赤・青・筒・イペリット・ルイサイトの訓練(教育)はしたことがある、天竜川河口の海岸でガス雨下演習を多く行った、と記している〔A32〕。</li> </ul> <p>(3) その他情報</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・元海軍兵士によると細江の山中、出ヶ谷には本土決戦用の兵舎が沢山あり、横穴が各地に掘られていた。当時の細江町長宅には陸軍の上級将校が住み込んでいた。井伊谷では、中野学校の生徒も訓練していたという。戦争末期に陸軍の兵士がやけどした状態の足を洗っていたという話があった。井伊谷</li> </ul>
--	--

	<p>の奥には戦後も兵舎が残っていたが、なかにはドラム缶もあり『ふれてはあぶない』といわれていた〔A33〕。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・環境省が実施した地下水調査の結果、毒ガス関連成分は検出されなかった〔A34〕。</li></ul>
--	---